

## 「武士の献立」 ★★★★

2014（平成26）年1月13日鑑賞<TOHOシネマズ西宮OS>

監督：朝原雄三

脚本：柏田道夫、山室有紀子、朝原雄三

舟木春（安信の妻、真如院の女中）／上戸彩

舟木安信（伝内の次男）／高良健吾

舟木満（安信の母）／余貴美子

舟木伝内（安信の父）／西田敏行

お貞の方（吉徳の側室、真如院）／夏川結衣

今井佐代（定之進の妻）／成海璃子

今井定之進（安信の親友）／柄本佑

大槻伝蔵（改革派のリーダー）／緒形直人

前田土佐守直躬（保守派の重臣）／鹿賀丈史

前田吉徳（加賀藩六代藩主）／猪野学

語り／中村雅俊

2013年・日本映画・121分

配給／松竹

### <同じ「武士」でも、『一分』ではなく『家計簿』の系譜>

山田洋次監督の「時代劇3部作」のフィナーレは、キムタクこと木村拓哉を起用した『武士の一分』（06年）。これは「シンプル・イズ・ベスト」を追求した完成度の高い作品だった（『シネマルーム14』318頁参照）。それに対して、同じ「武士の」で始まるタイトルの映画でも、森田芳光監督の『武士の家計簿』（10年）は、従来の時代劇の概念をガラリと変えた異色の時代劇。武士の魂は刀ではなく、そろばん！そう言い切り、自分の職分に徹する御算用者の生きざまを通して、複式簿記の体をなさない入払帳（現金出納帳）だけでも財政改革は可能！というメッセージを、借金大国ニッポンの政治家と国民にしっかり投げかけていた（『シネマルーム26』156頁参照）。

しかし、『武士の献立』というタイトルの本作は、明らかに『武士の一分』ではなく、『武士の家計簿』の系譜の映画だ。昨年12月4日に「和食」がユネスコの無形文化遺産に登録されたというニュースと合わせるかのように本作が公開されたのはタイムリーだが、「武士の魂は刀ではなく、包丁！」と言い切る加賀藩の包丁侍の生きざまとは？

### <「意外性」では堀北真希だが、「正統性」では上戸彩！>

本作のヒロイン春（上戸彩）は「出戻り」で、真如院（夏川結衣）の女中をしていたが、その自慢は肥えた舌と包丁の腕前。加賀藩の包丁侍・舟木伝内（西田敏行）が工夫した「鶴もどき」という汁椀の材料を見事に言い当てるほどの舌の持ち主だから、「この春を亡くなった長男に代わって、舟木家を継ぐことになる次男・安信（高良健吾）の嫁に」、と伝内が考えたのは当然。安信は包丁よりも、子供の頃からの親友・今井定之進（柄本佑）と競ってきた剣の道が好きだったが、客観的な状況を冷静に見れば、包丁侍になるのは仕方なし。しかし、そんな風にいやいや「お勤め」をしているようでは、料理の修行に身が入らないのは当然だ。そこで、春は「この古狸め！」とものしられながらも、少しずつ安信の料理の技術と心構えを再教育！遂には、病に倒れた父・伝内に代わり、徳川将軍をはじめとする諸大名への「饗応料理」の総責任者という大仕事を任せられることに・・・。

性格は良さそうだが、ちょっとやんちゃで、包丁よりも刀の方が大好きという年下の夫を、春はいかに盛り立て、教育していくの？そんなヒロイン像を上戸彩は見事に演じている。もっとも、製作委員会方式でつくられた本作は、いかにも正統派で教科書的。したがって、意外性の点では、『麦子さんと』（13年）のヒロインを演じた堀北真希に負けているが、正統性の点ではやっぱり上戸彩の方が上！

### <「予定調和」の進行の中にも、「加賀騒動」のリアルさが>

昨日試写室で観た『ザ・イースト』（13年）は、先の読めない展開が魅力の独創的な映画だったが、製作委員会方式による、料理をテーマとした本作は、ちょっとしたストーリー展開を見れば、それぞれの登場人物の役割を含め、全体のストーリーがすぐに見えてしまう予定調和的な映画。①春の舌と料理自慢が、伝内のたつての頼みによって、再度の嫁入りに至るストーリー、②そこで包丁より刀の方が好きな安信を少しずつ再教育していくストーリー、そして、③伝内が饗応料理の大役を仰せつかるストーリーを見ていると、半分寝ていても、「なるほど、本作はこんな映画！」というものが見えてくる。要するに、今のやさしくて平和なニッポン国と同じで、登場人物には誰一人として悪人はおらず、みんなが仲良く日々の営みをくり返す中で、みんなが幸せになっていくという単純なストーリーなのだ。そこで私は、映画が半分経過した時点で本作の採点を星3つと決めていたが、どうも気にかかるのが、緒形直人扮する大槻伝蔵の存在と、安信の友人・今井定之進とその妻・佐代（成海璃子）の存在だ。定之進は安信の幼なじみで剣の達人だし、佐代はその妻だから、安信とは今でも自由に付き合っているらしいが、それだけの存在の脇役なら、緒形直人や成海璃子という芸達者をキャストイングする必要はないはず。また、1月13日に観た『危険な関係』（12年）は、1931年の上海という激動の時代を背景とした、いかにもスキャンダラスな不倫恋愛ゲームだったが、本作でも真如院の部屋に大槻伝蔵が、「せめて最後に一目でも・・・」と忍び込んでいこうとするシーンにはいかにも不倫色が・・・。しかし、本作中盤からはナレーションの助けを借りて、「加賀騒動」が語られる。

加賀・前田家の「加賀騒動」は、福岡・黒田家の「黒田騒動」、仙台・伊達家の「伊達騒動」と並ぶ、「三大お家騒動」の一つだが、なるほど、なるほど。料理をテーマにした、ほんわかとした夫婦の物語に、藩内部の前田土佐守直躬（鹿賀丈史）を代表とする保守派VS大槻伝蔵を代表とする改革派との権力闘争や、大槻伝蔵を取り立てた六代藩主・前田吉徳（猪野学）死亡後の八代藩主・重熙の毒殺未遂事件を、真正面から持ち出すことができないのは当然。したがって、本作における「加賀騒動」の「史実」は、この程度の取り上げ方で十分だろう。予定調和の物語の中に、「加賀騒動」のリアルさを取り入れたことによって、本作の私の採点は星3つから星4つに。

### <あれは「内助の功」でも、これはちょっと・・・>

出来の悪い生徒を伸ばす方法には、しかる方法とほめる方法があるが、実はもう一つ黙って見本を示す方法もある。ちなみに、親戚一同を招いて料理を振る舞い、その出来を吟味してもらい、「饗（あえ）の会」で安信が出した料理が酷評される中、生臭さが残る汁椀を春が勝手に作り直したことによって、安信は面目を保つことができたが、さてその行為の是非は？これこそが「内助の功」という言い方もできるが、これでは何時になっても安信の料理の腕は伸びず、年上の女房に頼りきりになったり、場合によってはふてくされてしまう恐れも・・・。

まあ、この程度のことは「賛否両論あり」で軽く流せるが、お家騒動の亀裂が深まる中、中立を決め込んでいる伝内とは違い、親友の定之進が命がけで大槻伝蔵の下で働いている姿を見ている安信がそうはいかなかったのは仕方ない。六代藩主・前田吉徳の死亡によって、その側近だった大槻は越中の奥地、五箇山へ禁錮の刑とされ、定之進も国を追われてしまう等、改革派は「冬の時代」に突入した。しかしその後、定之進による「土佐守討伐計画」が進む中、ついに安信もその暗殺計画に加わる覚悟を決めたから、さあ大変。そんな計画に安信が加われば、舟木家はおとりつぶしになるのは必定だ。もちろん安信はそれを覚悟した上での決心だし、それを妻の春にだけ語り、自身は大事決行前の身を清めるべく、井戸の前に座ったが・・・。

そこから起きる「事件」はあなた自身の目でしっかり確認してもらいたいですが、その展開は私の目には如何なもの？としか思えない。「刀は武士の魂」と言われるとおり、安信は大事の決行前にちゃんと刀を研ぎ、いざという時にに向けて準備をしていたが、肝心の時に、肝心の人がいなくなり、肝心のものがなくなってしまうとは・・・。この少し漫画チックな展開は、親友・定之進の「斬り死に」という悲惨な現実と対比すれば、あまりにも安易なテレビドラマ風の展開で失笑ものだ。朝原雄三監督は、7作品も手掛けた『釣りバカ』シリーズでは、いいコミック色を出していたが、この展開はちょっと・・・。

### <このハッピーエンドは、いかにもお正月映画だが・・・>

年末年始のテレビ番組として、昔は『新春かくし芸大会』等の面白いものがあったが、今は観たい番組はほとんどない。そんな中、年末年始で私が注目したのは堺正章が司会する『カラオケ★バトル』と『あの名曲を方言で熱唱！全日本なまりうたトーナメント』の2つだ。これと同じように、映画でもお正月は家族みんなで楽しめるハッピーエンドの映画が人気（今年の『永遠の0』（13年）（『シネマルーム31』132頁参照）だけは例外として）だから、本作がハッピーエンドとなるのも、当然予定調和の世界。

大阪の裁判所の近くには①北新地に「かが万」②西天満に「佐助」と「芝苑」という加賀料理の店があり、私は何度もそこで食べたことがあるが、本作のクライマックスにみる御茶請、本膳から七の膳、さらに引菜膳、後御菓子まで続く、贅をつくした饗応料理の豪華さにはビックリ。2008年の北京オリンピックは張藝謀（チャン・イーモウ）監督が総指揮をとったが、本作で饗応料理を総指揮するのは心臓病で倒れた伝内に代わる安信だ。前半の頼りなさげな姿とは一転して、そのテキパキと自信に満ちた指揮ぶりは、実にお見事！

本作のテーマは料理？それとも夫婦の愛？本作をめぐるってそんな議論（？）があるが、ここで安信の料理人としての腕が認められ、舟木家も安泰となり、みんなが万々歳で終われば前者になる。ところが、更にそこから展開されるラストのストーリーをみると、本作の真のテーマが夫婦愛であることが明らかになる。考えてみれば、伝内が「何としても春を安信の嫁に！」と願ったのは、安信を一人前の包丁侍にしたい一念のためだったから、安信がここまで成長すれば、春の支援は無用。春がそう考えたのは理屈に合っているが、さて本作ラストにみる春の行動は？そして、そこではじめて見せる安信の男らしい行動とは・・・？予定調和のハッピーエンドだが、正月映画ならこの程度の予定調和もOKだろう。